Frederick Marryat's Perspective on Americanisms
フレデリック・マリアットから観たアメリカニズムズ研究

（要約）

広島大学大学院文学研究科
博士課程後期人文学専攻
学生番号：D125673
氏名：山東 資子

本論文は、これまでほとんど研究対象とされてこなかった、イギリス海軍士官でのちに作家へ転身した Frederick Marryat (1792-1848) に着目し、彼の視点から 19 世紀前半におけるアメリカ英語の状況を詳察することを目的とする。本論文は序論にあたる第 1 章、本文 5 章、結論にあたる第 7 章から構成される。

第 1 章では本研究に至る背景を述べた。アメリカが言語面で独立したのは Webster が *An American Dictionary of the English Language* を出版した 1828 年であり、The National Period (1776-1898)がアメリカ英語の確立した時期だといわれている。特に 19 世紀は多くのイギリス人がアメリカを周遊し、彼らが初めて遭遇した新しい英語の用法に関する記録を残している。Marryat もその 1 人で北米を旅行後、1839 年に *A Diary in America, with Remarks on its Institutions*（第 1・第 2 シリーズ [*Diary I, II*] 各 3 巻）を出版した。*Diary I*, Diary II をはじめ Marryat の作品には多くの Americanism が記述・使用されているが、ほとんど注目されてこなかった点を指摘し、本研究の意義を述べた。

第 2 章で Americanism の語源や先行研究について言及した。Americanism は Scotticism からの造語で、1781 年に John Witherspoon が初めて使用した。Mencken (1919, 1936[4])によると、イギリス人に軽蔑された最初の Americanism は *bluff* の名詞用法であった。他にも Thomas Jefferson が *belittle* という動詞を使ったことで非難を浴びるなど、現在に至るまで Americanism 批判は後を絶たない。アメリカ英語に関する先行研究として Mencken (1919, 1936[4])、Krapp (1925)、Marckwardt (1958)などが挙げられる。Mencken は *The American Language* というタイトルが示すようにアメリカ英語を独立した言語としてとらえているのに対し、Krapp は *The English Language in America* とあらわすことにより、英語の一方言としてとらえている。それに対し、Marckwardt は *American English* と表現し中立的な立場を取っている。その他、アメリカ英語に関する先行研究はあるもの

のイギリス人の観点から行った研究は少ないため、本研究の有用性を説いた。

第 3 章では Marryat が *Diary I* と *Diary II* の中で指摘した 78 の Americanism を Type I: イギリス本国では古語・廃語・方言となったがアメリカでは生き残った語句、Type II: アメリカで新たな意味を獲得した語句、Type III: 明らかにアメリカ起源の語句、Type IV: 既存の語を結合させて作られた語句、Type V: 他の言語から借用された語、Type VI: 品詞転換された語、Type VII: その他、に分類した。その結果、最も多かったのが Type II の 33 語句、次いで Type III の 25 語句であった。ただし名詞から動詞への品詞転換の例として挙げられていた *opinion* は obsolete であることから除外した。また 40 語句は、*Diary I* と *Diary II* でのみ使用されており、*OED* 初例として Marryat が引用されている語句が多い点も明らかにした。

第 4 章では *Diary I* と *Diary II* 以外の Marryat 作品で、どの程度 Americanism が使用されているか分析した。Americanism が登場するのは *FM* (1829), *KO* (1830), *PS* (1834), *JF* (1834), *ME* (1836), *PJ* (1840), *PK* (1842), *MV* (1843), *SC* (1844)の 9 作品である。第 3 章で分類した語句のうち 17 語句が 9 作品にみられるが、*clipper*, *log cabin*, *snake fence* は *Diary I* と *Diary II* では言及されていないことが判明した。*clipper* は既に 1830 年出版の *KO* で使用されているが、Marryat の経歴をかんがみると海軍時代に *clipper* の存在を知っていても何ら不思議ではない。*prairie* はフロンティアを代表する語で *MV* と *SC* だけに登場するが *prairie dog*, *prairie wolf* といった複合語としても使用されるため使用頻度が最も高かった。また Marryat が訪米前に出版した *FM*, *KO*, *PS*, *JF*, *ME* の 5 作品で *clipper*, *I calculate*, *I guess* が使用されていることが明らかになった。

第 5 章は Francis Trollope の *Domestic Manners of the Americans* (1832), Harriet Martineau の *Society in America* (1837), Charles Dickens の *American Notes* (1842)と *Martin Chuzzlewit* (1843-44)に焦点を当て、

Marryat が指摘した Americanism が彼らの作品に登場するか、4 人の見解が一致するか否かを検証した。第 3 章と第 4 章で扱った Americanism のうち 34 語句が 4 作品にみられるが、*absquatalize*, *backwoodsman*, *clear out*, *clipper*, *consider*, *ground hog*, *out of sight*, *some* は 3 人とも使用していない。Martineau は *prairie* には好印象を抱いているが Dickens は「二度と訪問したくない場所」と形容するほど拒否反応を示していた。また Marryat は *strike* には「攻撃する」の意味があると *Diary I* で言及していたが *MV* では「偶然行き当たる」の意味で使用しており、この点は Dickens と見解が一致していることが判明した。

第 6 章は第 3 章から第 5 章までのアメリカニズムズを Glossary としてまとめた。ここで用いた定義のほとんどは *OED* に記載されているものであるが、明記されていなかった語句については他の辞書および先行研究を参照した。

第 7 章は Marryat が *Diary I*、*Diary II*、その他の作品で言及・使用していた Americanism は、今回扱った他のイギリス人作家 3 人とそれほど大きく相容れない語句はなかったものの、*OED* 初例として取り上げられているものが多いことから、アメリカ英語が成立した早い段階で Americanism の存在に気づいたイギリス人作家であると結論づけた。